

光照寺の文化財建物 県内最古の鐘楼など

沼隈町「山南農協前」バス停から、南側の山の中腹を見上げると、高さ21mもあるイチヨウの大木と光照寺の本堂大屋根が見えます。

境内に続く石段を上ると、切妻造り本瓦葺の山門が石段に張り出すように建っています。大きな四脚門で、本柱控え柱とも円柱、天井は鏡板張りとなっていて、竹や虎を透かし彫りにした美しい慕股かえりまたたが見られます。慶長18（1613）年の棟札があり、意匠的に



山門

も優れた近世初期の代表的な建築物として、県重要文化財に指定されています。

山門を入ると、正面に巨大建築の本堂、右手に庫裏、左手に鐘撞堂、山門の西側に光照寺最古の建物、裏門があります。

鐘撞堂は、山門と同じ慶長18年建立で、方一間、入母屋造り本瓦葺、四方吹放しの四本柱の建物。県内では最も古い鐘楼で、県重要文化財に指定されています。長年の風雨にさらされ傷みが進んでいたため、このほど本格的な保存修理工事を行い、創建当初の姿によみがえりました。



鐘撞堂



同じく慶長18年建造の「旗差し」のある鐘は、市重要文化財で、修理の際の調査で鶴2羽と亀1匹の文様が浮き彫りされていることが分かりました。

浄土真宗は鎌倉時代に起こった仏教宗派の一つで、西日本には鎌倉時代末ごろ広まりました。元応2（1320）年、師親鸞に託された明光みょうこうが、山南の地で布教活動を開始し、弟子たちも近くに寺を構えてその活動を助けました。やがて、その教義は備後・安芸・出雲・石見・長門にまで広がり、光照寺は西国布教の拠点として重要な役割を果たしました。

静まり返った光照寺の広い伽藍がらんは、こうした長い歴史を語っています。

（2007年2月号に掲載）

靱の津の商家 靱の典型的な町家

靱の浦歴史民俗資料館が建つ靱城跡を東に下った駐車場の向かいに、主屋と土蔵が一体となった豪壮な建物があります。古い商家の間取りを残す靱の典型的な町家の好例で、「靱の津の商家」として市重要文化財に指定されています。



靱と商家の外観

主屋は、江戸時代終わりごろ建てられた平入・本瓦葺・2階建ての建物で、入り口には跳ね上げ式の大戸を取り付け、内部は通り庭(土間)に面して

店の間・中の間・奥の間が並んでいきます。

店の間は商品の陳列と販売、中の間は事務室、奥の間は接客空間、2階は居室として利用していました。通り庭の最奥は台所で、かつては竈かまどがあり今も屋根には煙出しが口を開けています。裏口を出ると坪庭で、奥の間に面しています。

土蔵は、主屋より少し遅れて建てられた、妻入・本瓦葺・2階建ての建物です。床を高くし、2階は登り梁はしを採用するなど、商品を多量にかつ確実に収納できるよう工夫されています。また、庇ひしをつけ、共有の土間で結ぶことにより主屋と土蔵を一体化し、商



かつての商家の店棚



活動の機能を高めたところに、この建物の特徴があります。

この建物は、江戸時代から明治初期には呉服を商う商家でしたが、1894(明治27)年に「靱製網合資会社」となり、漁具や船具類を北海道や東南アジアなどの広範囲に販売していました。主屋は商店として、土蔵は倉庫として使われ、向かいの駐車場が工場でした。2月から3月にかけては、「靱町並ひな祭」のメイン会場となり、江戸から明治期までのさまざまなひな人形が飾られ、多くの見学者でにぎわいます。特に、江戸時代の商人姿の出迎えと、土・日曜の甘酒の接待が人気を呼んでいます。

(2007年3月号に掲載)

ぬまくま文化館(枝広邸) 地域文化の応接間

沼隈半島の中央部、馬背山うまのせやまの南麓に降る雨は、半島の田畑を潤しながら水流を集め、流れゆるやかな山南川となり、瀬戸内海に注ぎ込んでいます。

その下流、沼隈支所のそばに架かる「鞆渡橋たもわたりばし」は、石造りの橋の欄干に、ガス灯風の街灯がしつらえられて、夜には柔らかな明りがともります。流れに沿って土手を進むと、擬木造りの橋が見えてきます。「鶴ヶ橋」と呼ばれ、古記録の引き札(広告)から復元されたものです。松並木の影を映す川面の向



枝広邸

こうには、幕末の面影を伝える平屋造りの建物があります。

幕末から3代続いたかつての開業医「枝広医院」の一部をそのまま保存し、新たに建物を建設して、現在の「ぬまくま文化館(枝広邸)」となりました。往時の面影を残す海鼠壁なましかべに檜造りの門長屋、ゆつたりと空間を活かした庭園、そして数寄屋造りの主屋や茶室があり、落ち着いた雰囲気を感じ出しています。

門を右側に入ると、潮の干満によって水面が上下するように工夫して築堤されています。池に架けられた石橋を渡り、岩の洞を抜けると、洞の真上にある二畳台目の茶室「清泉堂せいせんどう」に着きます。ここからは、手入れの行き届いた庭



苑池と清泉堂



園や、その昔、この辺りから眺める海が「口無しの海」と呼ばれたことから命名された茶室「梔子庵くわんじあん」を眺めることができます。また、庭木越しに見る山南川や、四囲を取り囲む緑の山の稜線りょうせんなどの景観もまた格別です。

ぬまくま文化館を取り囲む塀の前には、丸い赤いポスト、川岸の雁木がんぎ、そして、幕末の常夜灯などが今に残されていて、懐かしくも心安らぐ空間を提供しています。

(2007年4月号に掲載)

お手火神事

境内は火の海

7月第2日曜日の前夜、鞆の沼名前神社境内は、燃え盛る松明の炎で火の海と化します。「お手火神事」は、祇園宮の祭神スサノオノミコトの神輿渡御に先立つ祓の祭事で、市無形民俗文化財に指定されています。

大手火(松明)3体は、小割した肥松を、青竹だけでなく、神木のむろの木8本で周囲を固めるところに特徴があります。最後に横縄10本と縦縄3本で



拝殿前に安置される大手火

結んだ大手火は、長さ4m、重さは150kgもあります。

当夜、午後6時に第1鼓が白装束に白鉢巻の少年たちによって打ち鳴らされます。午後7時に第2鼓が勇壮に響き渡り、午後8時の第3鼓を合図に、本殿奥の神火から移した神前手火が、神官の先導で45段の大石段を飛びように下り、大手火に移されます。

点火した大手火3体は、大勢の担ぎ手によって、拝殿までの石段をゆっくりと練りながら上って行きます。詰めかけた観衆はそれに合わせて右に左に揺れ、火の粉と喚声が飛び交います。拝殿前まで担ぎ上げた大手火が安置される

ると、3体の神輿が境内を練り回り、火の祭典が終わるのは深夜に及びます。この神事は、江戸時代には祇園市と呼ばれ、旧暦6月4日の神輿洗いに続



大手火を担いで石段を登る



いて、その夜のお手火神事、7日には要害(大可島)への神輿渡御、14日の還御、そして、18日の神能祭へと続きました。

(2007年7月号に掲載)

能登原合戦伝承地

弓掛松と矢ノ島

能登原小学校の北側に、能登原八幡神社へと続く長い石段があります。その参道のふもとの小さな太鼓橋を渡ったところに、「弓掛松」の大きな根株が残っています。その広場には、市の指定文化財である鳥衾付きの石鳥居や目通り周囲2.3mのむくの木があつて、長い間、人々の大切な拠り所であつたことが分かります。

弓掛松は、目通り周囲4.6m、地上1.8mで枝分かれし、東西20m南北30mに



弓掛松

枝を広げた黒松でした。その地を這うような美しい姿から、1944（昭和19）年に国の天然記念物に指定されましたが、残念なことに1963（昭和38）年に枯死してしまいました。

江戸時代の郷土誌や地域に伝えられる「能登原合戦」の話によれば、源平争乱の時代も終焉を迎える1185（文治5）年2月、屋島の合戦に勝利を収めた源氏は、平氏を追って鞆の浦や田島に陣を敷きます。一方、平氏は能登原に陣を張り、にらみ合いが続きます。そして、3日目の早朝、白旗が闇の中にひらめき、鬨の音が海や陸に響き渡ります。



矢ノ島



平能登守教経は、松に掛けてあつた大弓を取り、相手陣営にさんざんに射掛け反撃します。しかし、不意をつかれ、挟み撃ちとなつた平氏は、敗色濃厚となり、やつこの思いで御座船を守りながら、西をめざして落ち延びていきます。戦いの後は、辺り一面血の海に染まったと伝えられています。

教経の射た矢は、海を越えて向かいの島に突き刺さりました。その矢竹から若葉が芽吹き、やがて生い茂ります。この竹は、矢の材料として適していたこともあつて、その島は「矢ノ島」と呼ばれるようになりました。

（2007年8月号に掲載）

鞆の津・八朔の馬出し 子どもの健やかな成長を願って

旧暦8月1日は「八朔」と呼ばれ、全国各地で、その土地独特の行事がありました。鞆町では、八朔の節句に男子の誕生を祝う馬出しが、江戸時代から行われていました。白い馬の模型を台に乗せ、その台に子どもを乗せて町中を引き回すという勇壮な行事です。

馬は、表面を胡粉で仕上げた精巧な模型で、犬くらの大きさから実物大の大きさまでさまざまです。たてがみと尾を付け、鞍・手綱・鐙も見事な仕上げで、首を少し上に上げ、今にも走り出しそ



石井町の商家から出る馬出し

うです。

残念ながら、この行事も昭和の初めには姿を消し、人々の記憶から消えかけていました。それをよみがえらせようという気運が高まり、2002年の午年を契機に、鞆町の住民によって70年ぶりに、子どもの健やかな成長を願う伝統行事が復活しました。

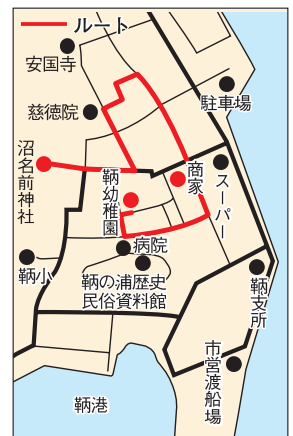
「八朔の馬出し」は、鞆町以外では福岡県芦屋町にしかなく（芦屋町では現在行われていません）、全国的にみても極めて珍しい民俗行事です。

前日には、とうがんなますや花餅など八朔の料理を再現して、古い商家の土間に飾った八朔の馬に供えます。

当日は、沼名前神社前に江戸・明治時代の馬や新しい創作馬が十数体集合



お手製の馬で練り歩く子ども



し、10時前から小学生や地元有志の太鼓で盛り上げた後、太鼓台を先頭に出発します。太鼓と音頭に合わせて町内約1kmを引き回し、昼前に鞆幼稚園に到着します。途中、商家の大戸を跳ね上げて、飾っていた八朔の馬を勢いよく引き出し、本来の馬出しを再現します。

（2007年9月号に掲載）

横倉平家伝承地 伝承に彩られた平家谷

「能登原合戦に敗れた平氏のある者は山を越え、またある者は山南川に沿って上流に遊り、隠れ住むようになった。」という、江戸時代の郷土誌や地域に伝わる話から、沼隈町横倉地区は、平清盛の甥、通盛にかかわる伝承の里として知られ、「平家谷」と呼ばれています。

「天神山」バス停から谷あいの道を東に進むと、行く手を阻むように両側から山が迫ってきます。この地形は



赤幡神社

追っ手を防ぐにも好都合で、平氏の一行は、辺りの物陰に隠れて八日間を過ごし、その後、さらに谷の奥深くをめざしました。

その道中には、一行が武運を試したと伝えられる「刀岩」が残されていました。昭和39年に完成した八日谷貯水池の湖底深くに沈んでいます。池沿いの道は、やがて谷間の集落に入ります。

通盛とその一行は、周りを山に囲まれた細長いこの谷を安住の地と定め、隠れ住むようになります。ここには、平氏ゆかりの「赤幡神社」や通盛夫妻を祀った「通盛神社」、また、密かに弓の練習をしたという「的場」や「弓



通盛神社



場」、侵入者を見張る「見張り所」、武将が馬の鐙を落としたという「鐙峠」などの地名や伝説が、数多く残されています。

古記録には、「この谷では、何事にも白い物が禁じられており、衣類に至るまで、すべてが赤く染めて使用された。白サギさえもこの谷には舞い降りない」という記述があり、特に平家の赤旗の色を守り続けてきました。今でも、通盛神社には赤い注連縄が張られており、伝承に彩られたこの谷の往時の姿が偲ばれます。

(2007年10月号に掲載)

山南川沿いの辻堂 路傍の休み堂



宮迫の休み堂

沼隈町宮本地域の山南川沿いでは、3棟の辻堂を見ることが出来ます。かつて、村々を結ぶ旧主要道の辻や峠に建てられた方一間の建物で、「休み堂」とも呼ばれ、誰でも自由に利用できるように、多くが4本柱の吹き抜けとなつています。床は板張り、屋根は宝形造りが多く、瓦葺きで、中には麦藁葺きもあります。勸請した仏像などから「地藏堂」「大師堂」などと称され、地名や建立者の

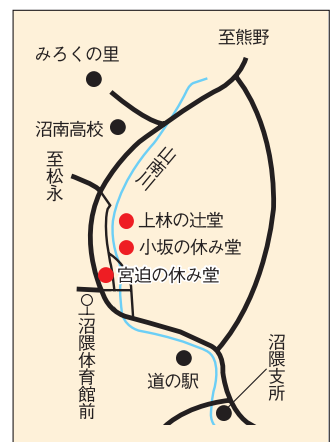
屋号で呼ばれることもあります。こうした辻堂は広く中国・四国地方に見られ、県内では備後と安芸東部に集中しています。

沼隈町の中央公民館バス停（現在の沼隈体育館前バス停）から山南川沿いの旧道を北へ進むと、宮迫橋のふもとに「宮迫の休み堂」があります。瓦葺き・宝形造り、吹き抜けの典型的な辻堂で、傍らに宮本自治会の表彰記念碑があり、休み堂3カ所の建て替えに功があったことが記されています。

山南川をさらに遡ると、右手に「小坂の休み堂」が見えます。再建記念碑によると、元文年間（1736）〜17



上林の辻堂の屋根内部(下から撮影)



41)に小坂地区の13名が願主となり、地藏堂として建立したのが最初のようなのです。その後、転々としながら、現在地には1994（平成6）年に再建されました。

さらに川を遡ると、やはり右手に「上林の辻堂」が見えます。屋根はトタンで覆っていますが、入母屋造りの麦藁葺きで、1889（明治22）年再建の棟札があります。当初の位置を保つ貴重な建物で、内部を見上げると、屋根の複雑な構造がよくわかります。

こうした辻堂は、福山初代藩主水野勝成が若い頃、諸国を遍歴し、辻堂の便益性を身をもって体験したことから、藩内の村々へ建てさせたといわれています。

（2008年1月号に掲載）

太田家住宅と雛飾り 雛飾りの似合う建造物群

靱港のシンボリック的存在である常夜燈のそばに、四方を路地で囲まれた広大な敷地をもつ「太田家住宅」があります。江戸時代初期から保命酒の醸造販売業を営んだ商家の遺構で、主屋や土蔵など9棟の重要文化財建物が重厚なたたずまいを見せる、瀬戸内を代表する建造物群です。

2001(平成13)年に6年の歳月をかけた保存修理事業が完了し、江戸時



心を和ませるお雛さま

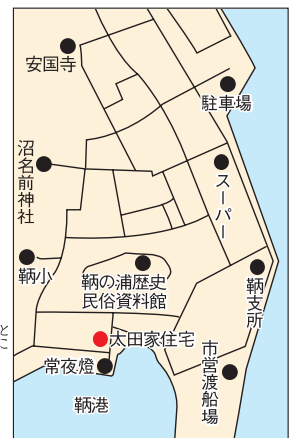
代後期の姿によりがえりました。玄関両脇には唐破風の看板掛けを設け、2階軒下には杉玉が掛かり、造り酒屋の構えをよく残しています。

2月から3月にかけて、靱の町並みを雛壇にして開催される「靱・町並ひな祭」では、文化財建物に江戸期から現代までのさまざまな雛人形が飾られ、多くの見学者の心を和ませてくれます。大戸をくぐり玄関を入ると、そこは土間を瓦と漆喰で固めた店の間で、まづ明治期の豪華な段飾りに目を奪われます。その奥には炊事場があり、広い土間や右手の座敷に、現代の干支雛や創作雛などが所狭しと並び、子どもたちも大喜びです。

さらに奥の大戸をくぐると、醸造関係の土蔵群が建ち並び、中庭から上の



太田家住宅



間・大広間へ上がれます。床の間には、江戸・明治期の雛人形が、その格式にふさわしい品を漂わせて、書院造の簡素な建物に溶け込むように、居心地よく座っています。

靱の町全体がひな祭一色で賑わう中で、太田家住宅の雛たちは、一味違った雅の世界に引き込んでくれます。

(2008年2月号に掲載)

中井萬蔵とマニラ移民 新たな漁場の開拓

田島の旧内海町役場跡地の近くに、中井萬蔵の功績を称える頌徳碑があります。

田島には平地が少なく田畑を耕すには適さなかったために、他地域に仕事を求めて出稼ぎをする島民が多くいました。中でも、西海捕鯨への出稼ぎは、江戸時代から明治30年代まで続く重要なものでした。しかし、幕末から欧米捕鯨の進出により西海捕鯨は衰退し、田島の出稼ぎ労働者の働き場はなくなっていました。

この頃、アメリカ領マニラ（現フィ



中井萬蔵

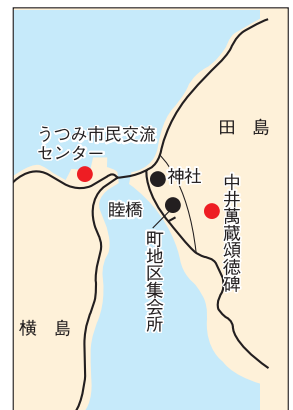
リピン)の豊富な水産資源に着目したのが、田島で麻網問屋を経営していた中井萬蔵でした。中井は、村会議員や沼隈郡会議員を務める一方で、屋敷の一面に郵便局を開き、郵便局長も務めていました。

1904(明治37)年、中井は農商務省の許可を得て、田島出身の4人の漁業者をマニラに送り出しました。その支度金、旅費、操業に必要な資金や打瀬船などのすべてを自費で提供しています。

4人は、マニラ湾を漁場にして漁に励み、順調に成果を上げていきました。この成功は郷土にも伝えられ、移民は二陣、三陣と続き、郷土出身者による村ができるほどでした。



中井萬蔵の頌徳碑



収入が増えたことで仕送りも増え、白壁の家を建てる人も多くなりました。今でも田島の町地区には、当時の建物が軒を連ねる界隈があります。

移民の中には、日本が敗戦間近になると蓄えた富もそのままに、やっと思いで郷土にたどり着いた人もいました。

西海捕鯨やマニラ移民関係の資料は、うつみ市民交流センター内の歴史民俗資料展示室で展示しています。

(2008年10月号に掲載)

坂本龍馬と鞆の浦

いろは丸沈没事件をめぐる

古くから「潮待ち」の港町として栄えた鞆の浦は、経済港として大いに栄えました。また一方で、歴史上の舞台へも度々登場する瀬戸内を代表する要港でもあります。

1867（慶応3）年4月23日、歴史上の大事件が瀬戸内の六島沖で起きました。坂本龍馬率いる海援隊が乗り込んだ蒸気船「いろは丸」は、長崎から大坂への航海中、紀州藩の明光丸と



海援隊宿舎(桝屋)

衝突したのです。これは、日本で初めての蒸気船同士の海難事故でした。いろは丸は、鞆港へ曳航される途中に宇治島沖で沈没しました。翌24日の明け方に、龍馬たちは鞆へ上陸し商家の桝屋を、紀州藩側は円福寺を宿舎としました。早速、その日から魚屋萬蔵宅や対潮楼で談判を4日間行いましたが、決着がつかず舞台は長崎へと移ります。

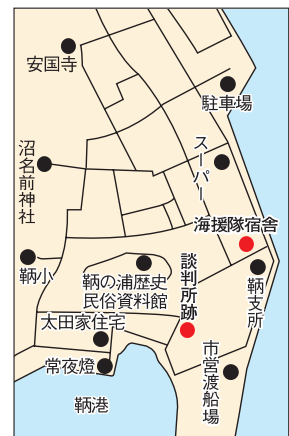
また龍馬は、鞆から手紙を数通出しています。寺田屋伊助には、形見のような時計を添えています。下関からは三吉慎蔵に、妻のお龍を頼むと遺言状にも似た手紙を出し、紀州藩と決死の大勝負をする決意を示しています。



談判所跡(魚屋萬蔵宅)

5月28日、龍馬は長崎から「鞆殿」（妻お龍）へ手紙を出します。手紙には事件の交渉が有利に進んだと意気揚々とつづっています。

翌29日、龍馬は画策を講じた末、万国公法に基づき紀州藩から多額の賠償金を取り、ついに龍馬は交渉に勝ちます。この快挙により、龍馬と海援隊の名は、一躍世間に知れわたりました。龍馬がこの交渉を上手く進めるために長崎の町衆に広めたという「船を沈めたその償いは金を取らずに国をとる」のごとく、賠償金とともに国をも動かす契機となった事件でもありました。



（2008年11月号に掲載）

備後の伝統産業 蘭草 長谷川新右衛門と中継表

備後地方で生産される蘭草いぐさで織った畳表は「備後表」と呼ばれ、美しい色合いと優雅な香り、耐久性が優れていることから最高の畳表として賞賛され、江戸時代には幕府への献上品となっていました。

備後で織られた畳表が文書に現れるのは、室町時代の長祿4（1460）年で、この頃の畳表は長い蘭草を端から端まで1本通して織る方法でした。江戸時代初めになると、沼隈郡山南



長谷川新右衛門の墓

村の長谷川新右衛門が、蘭草の先を交差させて織りあげる中継表なかつぎおもてを考案しました。この織り方は蘭草の太い部分のみで織ることが可能なため、均質で丈夫な畳表を作ることができます。これにより、以前は捨てられていた短い蘭草も使うことができるようになり、量産化が進み、他地域へも販売されたことから、福山藩の重要な財源ともなっていました。

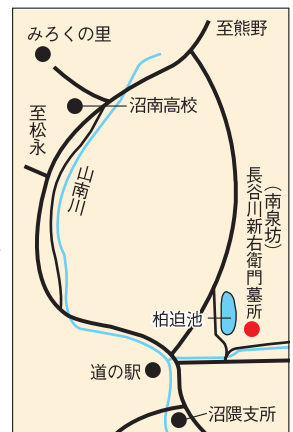
明治時代になって藩の規制が解かれると、一時質の低下を招き苦境に陥りましたが、明治19（1886）年、危機感を抱いた同業者が組合を設立します。厳しい自主検査を行い、品質改善と販路の拡張を進めるようになると、



蘭草田(熊野町)

備後の伝統産業は再び発展し、昭和初期には最盛期を迎えました。

近年では蘭草生産農家の減少などにより、優れた風合いを持つ手織りの技術はわずか数人の職人に受け継がれるのみになっていますが、畳は日本建築に欠かせない敷物であり、高級品としての「備後表」は現在でも根強い人気を誇っています。



（2009年7月号に掲載）

靱の津塔

靱商人の隆盛を語る

全国でも類例のない様式の石塔が、2000年に、靱の寺院3カ寺から計15基確認されました。

石塔は、阿弥陀寺(12基)、安国寺(1基)、大観寺(2基)にあり、戒名や古文書などから、靱の商人たちが建立したことが判明しています。

この靱独特の石塔は、墓石や供養塔で、高さが約2〜3mもある大規模なものです。製作年代は、1641年から1670年までの江戸時代前期の30年間に集中しています。この時期は、能舞台が沼名前神社に寄進され、町人



安国寺の靱の津塔

文化も興隆した時代でもあります。

石塔の形態は、宝篋印塔ほうきょういんとうと五輪塔の要素を合成し、さらに発展させたものです。上部は三つの団子が連なるような独自のタイプで、「三連珠さんれんじゆ」と呼ばれています。また、笠の隅飾すみかざり突起が、ほぼ直立する室町時代以前の古風な様式を残しています。この石塔に近いものに、東京の伝通院にある球心宝篋印塔がありますが、上部が異なります。

これほどの規模の石塔は、当時の町人階級のものとしては格段に立派なものです。この石塔は、靱の町人の隆盛ぶりを如実に示し、港町・靱が空前絶後の繁栄期を迎えていたことを物語つ



阿弥陀寺の靱の津塔

てくれます。

靱の浦は古来、海路により各地の文化が伝播でんぱし、それらを基に独特の文化を築いています。そうした中で、靱独自の新しい石塔は創造されたと考えられます。

靱町で発見された珍しい石塔を、調査にかかわった靱の浦歴史民俗資料館友の会では、衆議一致し『靱の津塔』と命名しています。

(2009年10月号に掲載)

